

3月のおはなし

# 「花粉症」

**俺**

は空港でドイツからくる客を待っていた。取引先の社長で、俺の役目はホテルまでのアテンド、後は役員連中が相手をする事になっていった。ま、一日だるまを見て過ごすよりはいい。

到着ロビーに現れたドイツの社長は鼻水を垂らしていた。右の穴の頂点に近いところから一〇センチ、歩く度ふらふら揺れている。意に介する様子も無い。気付いていないのだろうか。



それとなく水を向けてみるか。「日本はいまスギ花粉症のピークです。スギ花粉症はお持ちじゃないですか？」社長は頷いた。「それはよかったです。ただ突

然花粉症になることもあるそうですねので注意が必要です。なんでも……」

**そ**

の時、社長は何かに蹴つまずき、その拍子に鼻水が更にのびた。



長さ二〇センチ。歩調に合わせてゆらゆら揺れるのに、奇的にどこにも触れなかった。「人には花粉に対して許容量みたいなものがある、それを超えた瞬間、花粉症になるそうですね。つまり誰でもいつかは花粉症になる、ただその量は個人差もあって、いつなるかは分からないわけですが」

社長はかぶりを振った。鼻水がそれに追隨して動き、俺は思わず身を反らせて避けた。



「そんなのは与太話だ。祈祷師が人を呪い殺すのと同じ理屈だ」

「どういう意味でしょう」

「呪いは必ず成就する。人は『いつか』死ぬからな。『いつか』

というのは必然であって科学ではないし、また何の役にも立たん。状況をうまく説明出来ているからと言ってそれが真実とはかぎらんよ。真実というのは、この眼をよく見開いて見んな」

**そ**

う言つて自分の眼元をとんとん、と叩いた。

こちらの真意は伝わらないまま、彼の鼻水はきままに風に揺れている。それにしても随分攻撃的だ。

戸惑う俺に気付いて、社長は苦笑いをもらった。

「実は私はオーチャードグラスのアレルギーでしてな。ことアレルギーに関してはいい加減な話は許せんのです」

社長はそこでとてつもなく大きなくしゃみをした。同時に鼻水が五〇センチに達した。

**振**

幅は時に小さく、時に大きく、指揮者のタクトの

如く自在に動き回る。まさに神秘だった。



「あれの花粉はスギほど広範囲に飛ばんが、アレルギー反応はスギの一〇倍です。私の場合には眼ですな。ひどく掻きむしりたくなります。眼です。眼」

社長はそう言つて、今度は俺

の眼を指差した。その勢いに押されて俺は中途半端に頷く。眼はどうでもいい、鼻が問題なのだ。

俺が更に話しかけようとした時、社長は手を上げてそれを遮ぎり、躊躇いがちに話し始めた。

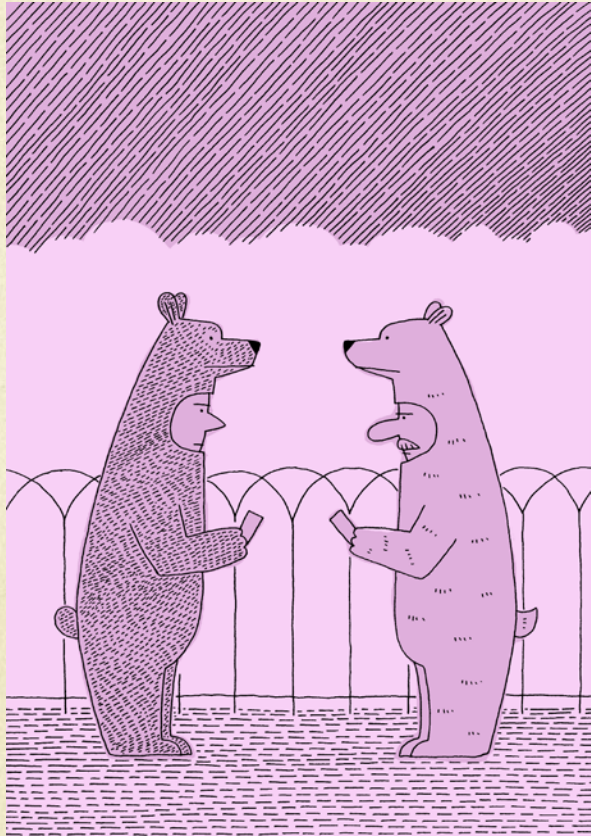
「やはり言わせてもらおう。

君、そのでかい眼ヤニを

どうにかしたまえ」 ■

「や

5



## 妄想の地平線

3月のおはなし

文 ハヤシアキオ 絵 凹工房

本書の無断複写・複製・転載を禁  
じます。

© HAYASI AKIO & BOKOKOUBOU